A 年顕現後第 2 主日　ヨハネ 1 章 29―41 節

［直訳］

29 翌日　彼は見る　イエスが 来る のを　彼の方へ　a
そして　彼は言う、
「見よ、　神の小羊が、　取り除く者が　世の罪を。

30 この方は　ある　彼について私が語ったところの者で、
『私の後に 来る 男が、　b
ところの　私の前に　成った、
というのは　私の先に　彼はいた』。

31 私も　知らなかった　彼を、　c
しかし　ようにと　彼が現される　イスラエルに　d
そのために 来た 私は　水で　洗礼を施しながら。

32 そして 証しした ヨハネは　言いながら　次のことを　d'
「私は観た　霊が　降るのを　鳩のように　天から
そして　それは留まった　彼の上に。

33 私も　知らなかった　彼を、　c'
しかし　遣わした方が　私を　洗礼を施すために　水で
その方が　私に　言った、
『誰でも　その上に　あなたが見る　霊が　降るのを　b'
そして　留まっているのを　彼の上に、
その者は　ある　洗礼を施す者で　聖なる霊で』。

34 私も　見た
そして　私は 証しした 次のことを　a'
この方は　ある　神の子で」。

35 翌日　再び　立っていた　ヨハネと彼の弟子たちの二人が
36 そして　見つめて　イエスが　歩いているのを　彼は言う、
「見よ、　神の小羊が」。
37 そして　聞いた　二人の　弟子たちは　話している彼に、

そして　彼らは従った　イエスに。
38　だが振り返って　イエスは
そして　じっと見て　彼らが　従っているのを　彼は言う　彼らに、
「何を　あなたがたは求めるのか」。
だが彼らは　言った　彼に、
「ラビ、それは　翻訳される　先生と、
どこに　あなたは留まっているのか」。
39　彼は言う　彼らに、
「来なさい　そして　あなたがたは見るだろう」。
それで彼らは来た　そして　彼らは見た
どこに　彼が留まっているかを、
そして　彼のもとに　彼らは留まった　その日。
時間は　あった　およそ第十で。

40　あった　アンデレで　シモン・ペトロの兄弟
一人は　ヨハネに聞いて　彼に従った二人の。
41　見つける　彼は　まず　自分の兄弟　シモンを
そして　彼は言う　彼に、
「私たちは見つけた　メシアを、―それは　翻訳される　キリストと」。
42　彼は連れて行った　彼を　イエスのもとへ。
彼を見つめて　イエスは　言った、
「あなたは　ある　シモンで、ヨハネの息子、
あなたは　呼ばれるだろう　ケファと、それは　訳される　ペトロと」。

［新共同訳］
29　その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。30　『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。31　わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。」32　そしてヨハネは証しした。「わたしは、〝霊〟が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。33　わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『〝霊〟が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。34　わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」
35　その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。36　そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。37　二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。38　イエスは振り返り、彼らが従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ――『先生』という意味――どこに泊まっておられるのですか」と言うと、39　イエスは、「来

なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。40 ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。41 彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア――『油を注がれた者』という意味――に出会った」と言った。

①構成

ⓐ29―34節は大きく二つに分けられる。しかも二つの段落は、31節と32節の間で折って重ねたように、次の四つの層が見事に対応している。

i 最も外側に信仰からの言葉　「神の小羊」と「神の子」
ii その内側に予告の言葉の引用　「私が語った」と「神が言った」
iii さらに内側には同じ言葉　「わたしも彼を知らない」
iv 真ん中にはヨハネの行為　「ヨハネが来た」と「ヨハネが観た」

第一段落は「神の小羊」というイエスの称号で始まり、ヨハネの活動（来た）で終わる。いわば上から下へという道であり、現在から過去へと遡る道である。それに対して第二段落では、ヨハネの過去の行為（観た）から始めて、「神の子」という現在の告白に上昇している。

ⓑ29―31節

第一段落では「来る」という言葉が一つの鍵となる。ヨハネはイエスが自分に近づいて「来る」のを見る。彼はこの「来る」に単に場所の移動以上の意味を見出す。イエスが世に「来る」のはヨハネよりも後であるが、実はヨハネよりも前にいた方である。ヨハネが「来た」のは、イエスが「イスラエルに現されるようにと」水で洗礼を施して、準備するためであるから、イエスの「来る」がすべての中心となっている。

ⓒ32―34節

第二段落の最初と最後には、「証しする」という言葉が置かれている。このことが示すように、この段落の中心テーマは「証し」にある。証しには体験が不可欠である。人間の体験が出発点になり、下から上へという動きが始まることによって証しは可能になる。しかし人間の体験は出発点にすぎず、体験だけでは証しにはならない。洗礼者ヨハネも「霊が降るのを観た」という体験をするが、イエスを「知らなかった」ヨハネがその意味を知るには、神の言葉が与えられねばならない。「神の子」への告白は、体験の意味を説き聞かせる神の働きによって可能になる。

ⓓ35―39節

洗礼者ヨハネはイエスが歩いているのを見つめて、「神の小羊が」と弟子たちに知らせると、彼らはそれを「聞いて」、イエスに「従った」とある。この37節の一行目で、ヨハネを指す「彼」に「話している」という分詞形がつけられているのが注目される。これはなくても良い言葉のように見えるが、これを置くことによって「聞いて」を強調しているのだろう。弟子たちもイエスの姿を見ているだろうが、姿を見て従ったのではない。ヨハネの言葉を聞いて従ったのである。38―39節では弟子たちとイエスの会話が始まるが、ここでは「留まる」が三度も使われ、キーワードとなっている。

ⓔ40―42節

聞いて、従ったアンデレは兄弟シモンを見つけて、「メシア」を見つけたと教え、彼をイエスのもとに連れて行く。すると、イエスは彼を見つめて、彼に新しい名前を与え、彼が神からの使命を受けたことを示す。この時、イエスはシモンを「見つめて」、二度も「あなたは」をくり返している。これによってシモンとの深い関わりが表されている。

②現在から過去へ（29―31節）

ⓐ「世の罪を取り除く神の小羊」はイエスが担う役割を示している。「罪」は、ここではさまざまな具体的な罪についてではなく、それらの罪の根底に横たわる「罪」そのものとも呼ばれるべき、人間存在に根深く巣くう「ゆがみ」を指している。

ⓑ「神の小羊」には次のような解釈がある。特にどれか一つの説に限定するよりも、広い含みを考える方がよいと思われる。

㋐イザヤ53章の、人々に平和といやしをもたらすために人々の罪を背負って死ぬ「苦しむ僕」と結びつける解釈。イザヤ53章7節では「屠り場に引かれる小羊」にこの僕がたとえられている。イエスに人々の罪のために死ぬ「主の僕」の姿を見たキリスト者が、イエスを「神の小羊」と呼んだ。

㋑「過越の小羊」と結びつける解釈。ヨハネ福音書では、イエスの死は過越の小羊が神殿で屠られる時に起こったとされ、過越の小羊の骨が一本も折られてはならなかったように、イエスの骨も折られなかったとされている（ヨハ一九36、出一二46）。イエスは過越の小羊であり、その死と復活はユダヤ教の過越の祭に取って代わる出来事である。

㋒「黙示的小羊」との関連を主張する説。ユダヤ教の黙示文学には、最後の裁きの日に現れ、世の悪を駆逐する羊が登場する（「十二族長の遺訓ヨセフ」の一九8など）。これがイエスに当てはめられ、イエスは「神の小羊」と呼ばれた。

ⓒ「神の小羊」の到来を目撃したヨハネは、自分の歩みを過去に向かって遡って行く。まず、「私の後に男が来る」と彼が語っていたのはこのイエスだったと確認する（一15）。イエスはヨハネよりも前に、さらにこの世が造られるよりも前にいた方であるから（一1―2）、ヨハネが「私はこの方を知らなかった」と言うのも当然である。「私の先に彼はいた」とヨハネは語ったが、「先に」という言葉は二つの意味を含んでいる。一つは「私よりも目上のもの、より偉大なもの」という意味であり、もう一つは「私より時間的に先にいた」という意味である。ヨハネよりも偉大でかつ、「先在」していた方としてのイエスが語られている。

ⓓヨハネは「この方を知らなかった」。しかし、「神の小羊」に出会った今は、自分が水で洗礼を施していたのは、この方が現れるためだったのだと分かる。この段落では時間の流れとは逆に今から過去へと遡っているが、これは使命の自覚が「神の小羊」という信仰による知識から始まることを示すためである。

③過去から今へ（32―34節）

ⓐこの段落では時間の流れに沿って、過去の活動から今の告白へと向かっている。ヨハネは霊が天から降って、イエスの上に留まるのを観た。ヨハネはイエスのことを知っていたわけではない。しかし、水による洗礼をヨハネに指示した神が、「霊が鳩のように天から降って、留まっているのを観たら、その人こそ聖霊で洗礼を施す救い主である」と教えてくれた。そこで洗礼者ヨハネ

は確信をもって、イエスは「神の子」であると宣言できる。「知る」という動詞はヨハネ福音書では単なる知的な理解であるよりは、イエスとの交わりに入ることを示す。ヨハネは単なるイエスの先ぶれというだけでなく、最初の理想的な証言者でもある。

ⓒここでは、ヨハネの体験から出発し、イエスは「神の子」であるという信仰の告白に到達している。体験がすぐに信仰の告白に結びつくとは限らない。聖霊がイエスの上に留まるのを見ても、神の言葉がなければ、奇妙な体験で終わる。体験が信仰の告白となるには、神の言葉による導きが必要である。

④イエスが留まっているところ（35―39 節）

ⓐ1 章 19―28 節は、エルサレムから派遣された人々と洗礼者ヨハネの問答になっており、イエスはまったく登場しない。洗礼者ヨハネ自身が、彼は荒れ野で叫ぶ「声」にすぎず、彼の後に偉大な方が来られる、と証しする。29―34 節では「翌日」という言葉で前の段落とのつながりが表される。洗礼者ヨハネは自分の方に来るイエスを指し示しながら、彼が「世の罪を取り除く神の小羊」であり、「神の子」であると言う。イエスは姿を見せるだけで、言葉は口にしない。35―42 節も「翌日」で始まる。「見よ、神の小羊」という証しを最後に洗礼者ヨハネは姿を消し、代わってイエスが表舞台に登場する。43―51 節も「翌日」で始まる。ここでは洗礼者ヨハネの姿が跡形もなく消える。イエスを証しするという彼の役割はこうして終わりを告げる。このように、1 章 19―51 節では、主人公が洗礼者ヨハネからイエスへと移り変わる様子が、実に巧みに表現されている。

ⓑ洗礼者ヨハネの二人の弟子がイエスに従ったのは、イエスを見たからではなく、ヨハネに「聞いた」からである。聞いて従うことによって、39 節でイエスがどこに留まっているかを「見る」。初めにあるのは「聞く」ことであって、「見る」ことではない。「聞いて」従うことの重要性は、40 節でこの二人の弟子の一人がアンデレであったことを述べるときに、彼らを「ヨハネに聞いて従った」と紹介していることからも明らかである。イエスとの出会いは肉体の目で見ることではなく、「聞く」ことによって始まる。

ⓒイエスは、二人の弟子に「何を求めるのか」と尋ねる。「求める」と訳された動詞は、ルカ 19 章 1―10 節の徴税人ザアカイの物語に二度使われている。ザアカイはイエスがどんな人か見「ようとし」（3 節）、イエスは失われたものを「捜して」救うために来た（10 節）。失われたものを「捜しに」来たイエスが、彼を見「ようとした」ザアカイに出会うとき、救いが生じる。イエスは捜し求めている。だが、相手も求めているのでなければ、出会いとはならない。そこで二人の弟子に「何を求めるのか」と尋ねる。この問いは招きであり、応答を求める問いである。

ⓓ二人はイエスを「ラビ」と呼んで、「どこにあなたは留まっているのか」と問い返す。ヨハネ福音書では、イエスを「ラビ」と呼ぶとき、その人がイエスを十分に理解せず、なにがしかの誤解を持っていることがほのめかされている（三 2、九 2 など）。イエスは「神の小羊だ」とヨハネから聞いてはいるが、イエスの真の姿を二人はまだ知ってはいない。そのような彼らが「どこに留まっているのか」と尋ねるとき、単に宿泊場所を尋ねているにすぎないだろう。しかし、イエスは宿泊場所を越えた「留まる」場所を持っている。

ⓔイエスが「来なさい、そしてあなたがたは見るだろう」と言うと、その言葉に聞き従い、二人はイエスがどこに「留まっている」のかを見る。この「留まる」は、もはや宿泊場所を表す言葉で

はない。二人が見たのは、イエスが「神の小羊」として働く力を受け取る場所である。イエスが「留まる」のは父の中である。そしてこの日、二人の弟子もイエスのもとに「留まった」。父なる神にイエスが留まり、そのイエスに弟子たちが留まる。ここから彼らの新しい歩みが始まる。

⑤「メシアを見つけた」と告げる（40―42節）

ⓐこの「留まる」という体験によって二人は「神の小羊」に出会う。何を「求めていた」のかに気づき、それを知った者が、喜びを分かち合うために外に出て行く。アンデレは真っ先に自分の兄弟シモンをイエスのもとに連れて来る。シモンもまた、イエスを見て、従ったのではない。メシアに出会ったというアンデレの言葉を聞いて従い、新たないのちが与えられる。ちなみに、アンデレはヨハネ福音書に三度登場するが、どの箇所でも他の人をイエスに結びつける仲介者として働いている（六 8―9、一二 20 以下）。

ⓑイエスはシモンを見つめて、彼に「ケファ」、つまりペトロ（岩）という名を与える。新しい名の授与は、イエスとの出会いを通して、新たな使命を与えられたことを意味する。

⑥証しを聞いて従い、イエスのもとに留まる

ⓐ洗礼者ヨハネは神との関わりを信じ、その神が救い主を派遣することを確信していた人である。しかし「私も彼を知らなかった」が二度も繰り返されているように、誰が救い主なのかを、前もって知っているのではない。第一段落では、信仰の言葉に留まらずに、体験へと下ることの大事さを説き、第二段落では、体験から信仰の言葉へと上ることの意義を教えている。信仰の言葉と体験とが一つになるとき、救い主の姿はいっそうくっきりと浮かび上がって来る。

ⓑ洗礼者ヨハネはイエスが自分の方に来るのを見て、「神の小羊」、「神の子」だと証しする。ヨハネはその事を初めからわきまえていたのではない。水による洗礼という使命を遂行するなかで、神の予告の正しさを知り、イエスを証ししたのである。

ⓒ第三段落では、人がどのようにしてイエスの弟子となるのか、その過程を描いている。洗礼者ヨハネの弟子だった二人はヨハネの証しを聞いて、イエスに従う。「来なさい、そしてあなたがたは見るだろう」と招くイエスの言葉に従い、二人は「イエスがどこに留まっているか」を見た。この「留まる」はここでは日常的な次元を超え、「人が自分本来のあり方を見いだしたところ」を指している。イエスは神のうちに「自分本来のあり方を見いだし、そこに留まっている」。父のうちに留まるイエスを「見て」、二人もイエスと共に「留まる」者となる。ヨハネ福音書の「見る」は、「見て、その本質を知って、信じる」ことをも含んでいる（一 51、六 40・47）。

ⓓ二人はイエスのもとに「留まる」。しかし、それで終わるのではない。外に行き、仲間をイエスのもとに導く。こうして、初めて「留まる」ことが完成する。この「留まる」ということが、他の人（アンデレの兄弟シモン）をイエスのもとに連れて来させる原動力となる。第三段落と第四段落の中心には「留まる」という体験が置かれている。

ⓔ41節の「私たちはメシアを見つけた」は、アンデレだけでなく、彼に導かれてイエスに「留まった」者も次々と受け継いでゆく言葉である。こうして、聞いて従い、イエスのもとに留まる者の共同体が広がって行く。そうであれば、ここでの「私たち」は、時代を越え、この共同体に属するすべての人を指している。現代に生きる私たちもこの「私たち」に連なり、イエスに留まり、「メシアを見つけた」と外に向かって告げる者となる。